

申請者	学科名	看護学科	職名	准教授	氏名	岡崎 愉加 印
調査研究課題	新人助産師における分娩介助技術の習得過程					
交付決定額	200,000円					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	岡崎 愉加	看護学科・准教授	助産学・母性看護学	研究計画、調査、分析、論文作成、発表	
	分担者	原田さゆり	看護学科・助教	助産学・母性看護学	情報収集、分析	
調査研究実績の概要	<p>【目的】 本研究の目的は、分娩介助技術の習得過程において、新人助産師がどのような行動をしているかを明らかにすることである。</p> <p>【方法】 平成27年1月～3月、A大学の助産師課程を卒業し、分娩介助業務に携わって5年未満の助産師8名を対象に、1時間程度のインタビューを実施した。インタビューの内容は、新人助産師の時に、分娩介助技術習得のためにしたこと、習得を促進させた出来事、習得を困難にした出来事、習得が困難な技術、習得に必要な支援の内容等であり、承諾を得て録音した。録音したインタビュー内容を逐語録にした。</p> <p>分析は、分娩介助技術の習得過程で新人助産師がしたことに着目して、質的帰納的に内容分析を行った。逐語録から分娩介助技術習得のためにしたことの語りの部分を抽出してコードとし、コードの相違点・共通点を比較分類しサブカテゴリーとした。さらに同じ意味内容でまとめてカテゴリーとした。</p> <p>倫理的配慮として、研究対象者には、研究の目的と方法、研究参加は自由意志で決められ、同意後でも撤回できること、研究参加の有無により不利益を被ることはないことなどについて、文書と口頭にて説明し、同意書を得た。なお、岡山県立大学倫理委員会承認後に実施した。</p> <p>用語の操作的定義として、「新人助産師」とは「就職後初めて分娩介助をした時から1年以内」とした。「分娩介助技術」とは「分娩第2期の胎児娩出に伴う技術に限らず、分娩第1期から分娩終了2時間後までに助産師が行う観察・アセスメント・助産診断・ケア」とした。</p> <p style="text-align: right;">次頁に続く</p>					

<p>調査研究実績 の概要</p>	<p><b>【結果】</b></p> <p>1. 研究参加者の概要  研究参加者8名の平均年齢は24.8歳であった。全員が産科以外の複数の診療科を持つ病院に勤務している。助産師としての経験年数は、1年未満が2名、1年以上2年未満が2名、2年以上3年未満が2名、3年以上4年未満が1名、4年以上5年未満が1名であった。学生時代の分娩介助例数は、8名全員が10例であった。新人助産師時代の分娩介助例数は、20例未満が2名、20例以上40例未満が4名、40例以上が2名であった。</p> <p>2. 分娩介助技術習得のためにしたこと  分娩介助技術習得のためにしたこととして、119コードが抽出され、それらは23サブカテゴリー（「 」で示す）、6カテゴリー（〈 〉で示す）に集約された。「分娩介助後に先輩と一例一例振り返りながら勉強した」「先輩から口頭と文章で評価を受けた」「10～20例くらいまでは病院の評価表を用いて自己評価し、先輩から指導を受けた」「振り返りでわかった課題を次の目標にし、意識して次の分娩介助をした」のサブカテゴリーは〈評価表を用いた振り返り〉に、「病院の評価表がなくなっても自主的に記録し振り返りを継続した」「学生時代の実習記録を活用した」「教材や講演会を利用して勉強した」「分娩にあたるように積極的に行動した」「自分から先輩に働きかけて教えてもらった」「病院のやり方に慣れるようにした」「異常や急変を体験したときに勉強した」のサブカテゴリーは〈自主的な学習〉に、「最初は二人羽織のような形で先輩と一緒に手を当てて教わった」「異常分娩や苦手な技術は先輩に手を添えてもらった」のサブカテゴリーは〈先輩に手を添えてもらう〉に、「間接介助者として分娩に入り、先輩を見て学んだ」「先輩をまねながら学んだ」「見て、やって、振り返る経験を積むようにした」のサブカテゴリーは〈見て、まねる〉に、「自分の判断が正しいかを先輩に聞いた」「内診のタイミングや所見を先輩に聞いた」「異常の判断と医師への報告のタイミングを先輩に聞いた」「10例過ぎぐらいから先輩に見守ってもらった」「先輩や同僚の体験談を聞いて参考にした」のサブカテゴリーは〈先輩へ相談〉に、「異常の判断などは医師に教えてもらった」「分娩介助時に医師の指導を受けた」のサブカテゴリーは〈医師から学ぶ〉に集約された。</p> <p><b>【考察】</b>  新人助産師は、〈評価表を用いた振り返り〉を先輩助産師と一例一例行うことで課題を明確にして次の分娩介助に臨んでいた。病院規定の評価表が終了した後も、独自の方法で記録しながら振り返りを継続し、実習記録等の教材や講演会を利用して勉強したり、自分から先輩に働きかけて教えてもらったり〈自主的な学習〉をしていた。これらのことから、自主学習を助けるシステムがあればよりスムーズな習得ができると考える。分娩第2期の胎児娩出に関する手技は〈先輩に手を添えてもらう〉ことから学びはじめ、間接介助者として分娩に入り、先輩を〈見て、まねる〉を繰り返し、経験を積むことで習得していた。自分の診断が正しいかどうかは〈先輩へ相談〉することで確認していた。これらは、分娩介助技術の習得には先輩助産師の役割が重要であることを示唆しており、新人教育の担い手である先輩助産師を教育者として育てる取り組みが必要であると考えられる。また、新人助産師は先輩助産師のみでなく〈医師から学ぶ〉機会も得ており、技術習得のために医師に対しても積極的に働きかけている様子が伺える。特に異常の判断や対応に関しては医師の協力も得ながら新人教育を実施する方策が必要と考える。</p> <p><b>【今後の課題】</b>  引き続き分析を行い、習得を困難にした出来事、習得が困難な技術、習得に必要な支援の内容について明らかにした上で、分娩介助技術の習得を促進する具体的な方策について検討することが今後の課題である。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>(成果資料等があれば添付すること。)</p>